

浜松地域における楽器工業の構造とその変遷

松木知子

今日、楽器の世界一の量産国は日本である。そしてその日本国内で楽器生産の圧倒的割合を占めているのが、浜松地域である。弦楽器を除く洋楽器は、90%以上浜松地域で生産され、特にピアノは100%を占める。しかし、その最も主要な生産品であるピアノの出荷台数が、昭和55年をピークに下降線を辿り始めた。さらに電子楽器の台頭、輸出人の増加等、ここ10年程の間に楽器製造業界は大きく変化した。そこで、浜松地域において、3大工業（繊維・楽器・オートバイ）の1つとして重要な位置を占めている楽器工業の発達過程、工場分布、生産状況等をみながら、立地要因分析と浜松地域・楽器工業の今後を展望しようと試みた。

洋楽器の国内生産は、明治時代になってから学校教育に西洋音楽がとり入れられたため、主に関東地域と浜松地域でオルガンメーカーが生まれ、やがてピアノメーカーとして量産化を競っていったことに始まる。スタートは東京や横浜のメーカーが早かったにもかかわらず、浜松地域のメーカーがのし上がり、関東勢が衰退した。現在、工場は浜松市を中心に集積しており、集積地域はさらに周辺市町村へ広く拡大している。このように浜松地域で発展が成功した要因は、①ピアノ用木材の乾燥に適した温暖かつ乾燥した気候、副業の木材加工品を支えた天竜川上流の森林資源等の自然条件、②地理的に大都市をつなぐ大動脈の midpoint に位置するという交通の至便性、③浜松地域に次々と派生した一連の産業発展による技術と工場の集積、④地域の盛んな協力による豊かな資本、⑤企業家精神に満ちた気風、等が考えられ、山葉寅楠の来浜時のオルガン修理という偶然的きっかけが、土地の好条件によって必然的に発展していった、と言うことが出来る。

しかし、構造不況に陥りつつある現在、いつまでも地域は楽器工業に依存するわけにもいかなかった。生産が伸び悩む原因は、①幼児数の減

少、②ピアノ普及率の伸び悩み、③習い事の多様化、④住宅着工数の減少、⑤生活騒音意識の高まり、⑥電子楽器の急成長と電気メーカーの参入、⑦円高の到来による輸出不振、⑧韓国製ピアノの台頭、が挙げられる。また、それらの業界不況と他業界の好景気、それに製造業の中でも特に煩雑な工程を持ち、生産技術の習得に時間がかかるといふデメリットゆえに、技術を伝達すべき若者が確保しにくく、技術者不足が生じている。

その打開策として、経営縮小、多角経営化、輸出の増大、電子楽器生産の増大、製品の高品質化兼差別化、中小メーカーの合併案がある。しかし、多角化と輸出増大、電子楽器生産の増加は、大手メーカーのみが出来ることであり、零細メーカーは経営合理化と品質差別化で、限られた販路を維持してゆくしかない。

浜松地域には、現在2巨大メーカーと5中堅メーカー、10零細メーカーがあるが、競争と不況によってここまで淘汰された。その過程には、工場数の減少と規模の分極化がみられ、現在も2大メーカーの傘下で零細メーカーが存在している。この現象は他業界では考え難いが、零細メーカーが部品工場の集積など大手にあやかって経営出来ている面も多いこと、製品が芸術品であるために商品価値が消費者の感性に委ねられ、機能だけで勝負がつかないことによる。従って、抱えた問題は深刻だが、世界的な楽器の街が楽器の街でなくなることもなく、この立地形態はまだ続くと思われる。しかし、今後生存競争は激化する上、そもそも浜松の楽器工業は、初めて芸術品を工業製品と割り切って量産したのが始まりなだけに、感性を磨いた上での品質追究を見直すことが重要である。さらに地域行政が文化都市への脱皮を図っている現在、経済面だけでなく文化面でも地域に貢献するなど、地域・楽器工業共に働きかけ合って活路を見出ししていくことが望まれる。